

【論文】

ヘルン文庫書き込み調査報告

——『ギリシア詞華集』と『ルバイヤート』をつなぐもの——

中島淑恵

はじめに

富山大学附属図書館所蔵のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）旧蔵書（ヘルン文庫）に収められている英語版の『ギリシア詞華集』（書架番号[302] *The Greek anthology : as selected for the use of Westminster, Eton and other Public schools / literally translated into English prose, chiefly by George Burges, to which are added Metrical Versions by Bland, Merivale, and others, and an index of reference to the originals*, London, G. Bell, 1893.）¹⁾の書き込みについては先に論じたが、裏見返しの書き込みでオマール・ハイヤーム(Omar Khayyam)とあった276頁の内容について、オマール・ハイヤームの著作、すなわち『ルバイヤート』との関連で詳しく論じる機会がこれまでなかった。

ヘルン文庫には2冊の『ルバイヤート』がある。一つはここで論じる、フィッツジェラルド訳（書架番号 [97] *Fitzgerald, Rubaiyat of Omar Khayyam in English verse / Edward Fitzgerald. - New York, Houghton Mifflin. 1888.*）であり、これには数多くの書き込みがある。いま一つは、マクミランの教科書版シリーズ（書架番号[398] *Rubaiyat, Rubaiyat of Omar Khayyam, the astronomer-poet of Persia: rendered into English verse. - London, Macmillan. 1899. Golden treasury series.*）で、こちらには全く書き込みはない。フィッツジェラルド訳は1859年にまずは匿名で出版され、すぐに注目されたわけではないが、やがてロセッティやスウィンバーン、フートン卿によって評価され、1868年の改定版発表以降は、まずは英国の文学に大きな影響を与え、わが国の文壇においても、蒲原有明の和訳（明治41（1908）年）などによって、アラビア語からの直訳が紹介されるまでの長きにわたって、大きな影響力を及ぼしてきたものである。

ヘルン文庫所蔵のフィッツジェラルド訳『ルバイヤート』は1888年の版であり、来日後に入手したものと考えられるが、ハーンがいつからこのフィッツジェラルド訳の存在を知っていたかについては不明である。アメリカ時代にはすでにその評判を耳にしていた可能性が高いのではないかと思われる。

小論では、ヘルン文庫所蔵の『ルバイヤート』の書き込み調査の結果をもとに、1903年に東京帝国大学で講じられたとされるハーンの「エドワード・フィッツジェラルドとルバイヤート

(Edward Fitzgerald and Rubaiyat) 」²⁾の内容を吟味しながら、『ルバイヤート』がハーエンに与えた影響について考察を試みることにする。

1. 英訳版『ギリシア詞華集』の「オマール・ハイヤーム」の書き込み

同書裏見返しに「オマール・ハイヤーム (Omar Khayyam)」の書き込みのある 276 頁には、傍線等の書き込みはないが、詠み人しらずの以下のような詩が収められている。

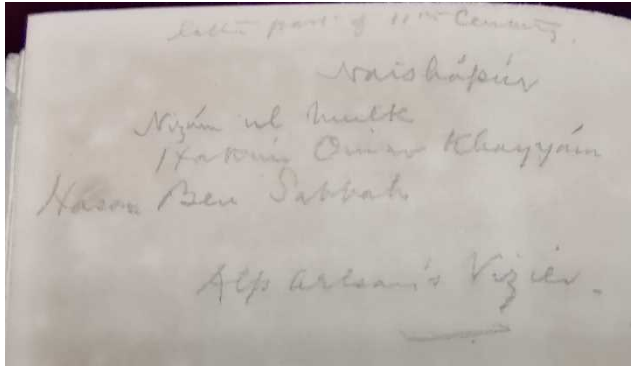
How was I born? Whence am I? For what have I come? To go away again. How can I learn anything, knowing nothing? Being nothing. I was born. I shall be again as I was before. The race of voice-dividing (men) is nothing and nothing. But come, prepare me the pleasure-loving stream of Bacchus; for this medicine is the antidote of ills.

どのようにして私は生まれたか、私はなぜ存在しているのか、何のために私は来たのか、もう一度行ってしまうために。何も知らずして私は何かを学ぶことができるのか、何ものでもなく、私は生まれた。私はかつてそうであったものにまた戻るのである。声によってより分けられる種族（人間）は無の無である。しかしここに来てバッカスの楽しみを愛する小川を私に用意せよ、この薬は病を癒すものであるからには。

この詩は人生の無常なることを詠ったもので、たしかに『ルバイヤート』にしばしば示される無常観と通底する境地が物語られていることは一見してわかる。とりわけ現世の憂さを酒で晴らそうとする末節はいかにも『ルバイヤート』を思わせるものである。この他に同書裏見返しの書き込みには、同じような無常観を述べる 117 頁の「空の空なるかな (vanitas vanitatum)」や 165 頁のグリコンの詩なども見られるが、これについては先に論じたので、小論ではヘルン文庫所蔵『ルバイヤート』の書き込み調査の結果をまず示すことにしたい。

2. ヘルン文庫所蔵オマール・ハイヤーム『ルバイヤート』の書き込み

以下に、ヘルン文庫所蔵フィッツジェラルド訳の『ルバイヤート』の書き込みについて確認しておきたい。まず同書裏見返し左側冒頭には、以下のような鉛筆による書き込みがみられる。なお、右側に筆者による転写を示す。



Alabian poet of 11th Century

Naishapur

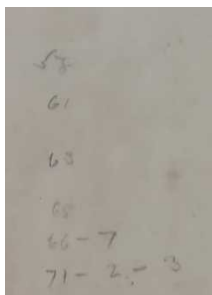
Nizam ul Mulk

Hakim Omar Khayyam

Hassan Ben Sabbah

Alp Arslan's Vizier

さらにこの下には、以下のように数字が縦に書かれている。右は筆者による転写である。



58

61

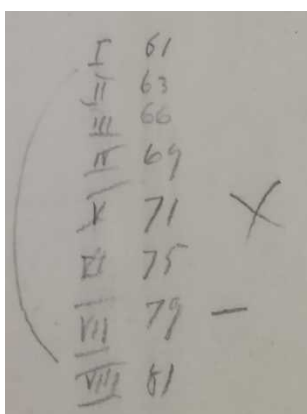
63

65

66、7

71、2、3

また、同じ裏見返しの右側には、ローマ数字とともに、以下のように数字が縦に書かれており、その左側には大きくまとめるような弧が、また右側には、V 71 の右に×印、VII 79 の右にー印が記されている。これも該当箇所の写真と筆者による転写を以下に示す。



I 61

II 63

III 66

IV 69

V 71 ×

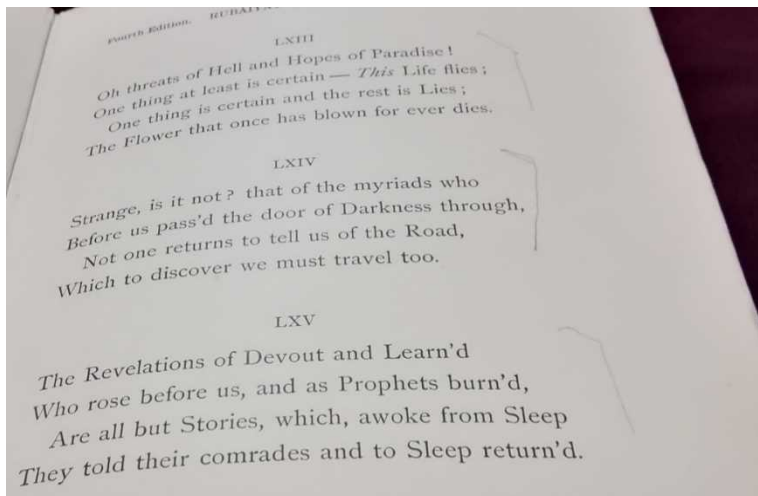
VI 75

VII 79 —

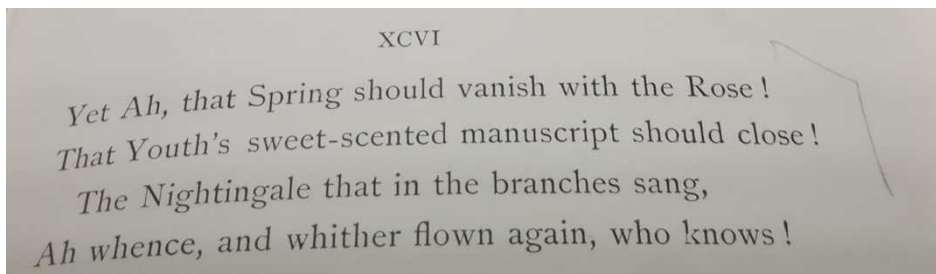
VIII 81

これまでの通例として、算用数字は本文中の関心のある頁、×印やー印の付いている箇所は、はとくにハーンが注目した箇所であると考えられる。たとえば71頁には、以下のように三つ

の詩の右余白に傍線の書き込みがみられる。



同じように 79 頁にも、一つの詩の右余白に傍線がみられる。



このようにして精査してみると、同書裏見返しに書き入れられていた頁には必ず上記のような傍線が余白に書き入れられていることが判明した。もちろん頁によって、1 篇の詩のみに傍線が引かれている場合もあれば、2 篇以上の詩に傍線が引かれている場合もある。また、裏見返しに数字の記入がない箇所本文の余白に傍線が引かれていることはなかったことも追記しておく。

3. 東京帝国大学講義録「エドワード・フィッツジェラルドとルバイヤート」から

3-1. フィッツジェラルドの訳業に対する高評価

フィッツジェラルドの『ルバイヤート』訳を取り上げた表題の講義だけでなく、講義録の端々から、ハーンがフィッツジェラルドの訳業を高く買っていた様子をうかがうことができる。たとえばハーンは、「卓越した散文の研究」の講義の中で、英語は、英語で書かれた文学資源のみを学ぶだけでなく、世界中の人類の英知を学ぶことができるために有用であると説いている箇所で、フィッツジェラルドの翻訳を以下のように高く評価している。

But you have certainly learned how great some English translators have proved themselves, even in verse, - for example, Fitzgerald; and scarcely less interesting and

sympathetic than Fitzgerald is Palmer's volume of translation from the ancient Arabian poets³⁾.

しかし、君たちはしかと学んだはずである。英国の翻訳家のうちには、韻文でもその偉大なる力量のほどを示した者がいたことを。たとえばフィッツジェラルドである。そしてフィッツジェラルドに比肩しうるほどに興味深く共感を呼ぶものは、パーマーによる古代アラビア詩人の訳業くらいである。

あるいは、「偉大なる翻訳家」について論じた講義の中でも、基本的に古典語で書かれたものの翻訳はフランス語やドイツ語で書かれたものの方がよい、としながら、フィッツジェラルドの訳業を英訳の例外として称賛している。

We prefer the French and German translations. There is indeed one astonishing exception - Fitzgerald's translation of Omar Khayyam. But this is much more than a mere translation: it is a recombination, and the work of a very rare genius. For one Fitzgerald, you have a hundred Brownings⁴⁾.

我々はフランス語またはドイツ語による翻訳をよりよいと認める。確かに驚くべき例外が一つある、フィッツジェラルドによるオマール・ハイヤームの翻訳である。けだしこれは、実に単なる翻訳以上のものである。すなわちそれは（翻訳というよりむしろ）再構築なのであり、たいへん稀な天才の力業なのである。一人のフィッツジェラルドに、百人ものブラウニングがいるほどである。

3-2. 講義「エドワード・フィッツジェラルドとルバイヤート」から

このようにハーンが常に称賛するフィッツジェラルドを正面から取り上げた講義が、1903年に講義されたとされる「エドワード・フィッツジェラルドとルバイヤート」である。講義はまず、フィッツジェラルドの紹介から始まり、さらにまずその訳業を以下のように称賛している。

Therefore you might well wonder how mere translation could rise to the dignity of the very highest place in literature. The only possible answer is that Fitzgerald was probably the best translator that ever lived. He did not make literal translations; he translated only the spirit, the ghost of things⁵⁾.

そこで諸君は、単なる翻訳が如何にして文学において最高位の高みに上り詰めることができ

るのかといぶかしく思うかもしれない。それに対する唯一の回答は以下の通りである。すなわちフィッツジェラルドはこれまでに生きた翻訳者のうちで最良の翻訳者であると。彼の翻訳は逐語訳ではない。彼はその精神を、事物の魂を訳出したのである（下線部筆者）。

ここでハーンの述べている「魂（ghost）」の解釈については紙幅の関係もあり、ここでは詳述しないことにするが、ハーンがフィッツジェラルドの訳業をいかに高く評価していたかが伺える箇所である。

これに続いて、オマール・ハイヤームが紹介される箇所を見ておきたい。まずは導入部である。

In the eleventh century at a little school in the Persian City of Naishapur, there were three students studying Mohammedan law together, under a very famous teacher⁶⁾.

ペルシャのナイシャプールという町で 11 世紀に、たいへん高名な先生について一緒にモハメドの方を学ぶ三人の学生がいた（下線部筆者）。

これに続けて、この 3 人の学生の名が明かされる。

One of these students was the famous Nizam ul Mulk, who afterwards became Vizier to the great Sultan Alp Arslan; the second student was our poet Hakim Omar Khayyam; and the third who afterwards made a most terrible name in the history of the world, was Hasan Ben Sabbah.

これら 3 人の学生のうちの一人は、ニザン・ウル・マルクであり、のちにスルタン・アルプ・アルスランの大臣となった人物である。もう一人は我々が詩人ハキム・オマール・ハイヤーム、そして三番目は、のちに世界の歴史の中でもっとも凶悪な悪名を上げたハッサン・ベン・サバーである（下線部筆者）。

こうして見てくると、この箇所に羅列された固有名詞が、先に見たフィッツジェラルド版の裏見返しの冒頭に書き込まれていたものであることが分かる。こうしたことから、裏見返しの書き込みは講義で説明するためにキーワードをまとめて記したものなのではないかと推測される。

この後さらにオマール・ハイヤームの紹介をした後で、ハーンは、オマール・ハイヤームの詩が今日読むに値する詩である理由を、「しかし、彼の詩作の偉大なる、不朽の魅力は、この宇宙の重大な問題を不安に思うようなことではないと助言することにある（But the great,

immortal charm of his composition happens to be in the way that he treats this very problem of the universe which he advises us not to worry about.)」⁷⁾と説いている。なんと
なれば、オマール・ハイヤームが、「メランコリーと皮肉なユーモアを交えた奇妙な合成物と
してその最高に成功した美しい詩の中で考察するのは (which Omar Khayyam has
considered in the most winning and beautiful verse with a strange mixture of melancholy
and of ironical humour)」⁸⁾、「存在のはかなさ、死の恐怖、若さの移ろいやすさ、説明不可
可能なことを説明しようとする哲学の愚かしさ (the impermanence of existence, the riddle of
death, the fading of youth, the folly of philosophy in trying explain the unexplainable)
(Ibid.)」といった、人類普遍のテーマについてだからである。

全般的なこのような導入に続いて、具体的に詩を紹介する前に、ハーンはフィッツジェラルドの英訳が『ルバイヤート』の形式的な押韻形式をも反映させていることを説明している。

The English translator has correctly imitated the Oriental measure in these quatrains, --- Which contain four lines all rhyming together except the third. The third line has no rhyme; the other three rhyme. Occasionally you may find the whole four rhyming together; but that is an exception to the general rule of the verse. The imitation of this Oriental measure may thus be said to have given to English literature an entirely new form of verse⁹⁾.

この英国の翻訳者 (フィッツジェラルド) は、これらの四行詩で、東洋風の韻律を正確に模倣している。すなわち、3 詩行以外はすべて韻を踏んでいるのである。3 詩行目は韻を踏んでいないが、ほかの行は韻を踏んでいる。場合によっては 4 行とも韻を踏んでいる場合があるが、それはこの韻文の一般的な規則から見れば例外である。このような東洋風の韻律の模倣が、英国の文学に全く新しい韻文の形式を与えたといわれている。

四行詩自体はヨーロッパの韻文でも古来から存在する形式であるが、通常は 1 行目と 4 行目を押韻する抱擁韻か、2 行ずつ韻を踏む平韻、あるいは 1 行おきに韻を踏む交差韻が常であり、3 行目のみを押韻しないというあり方はヨーロッパでは確かにそれまで行われなかった形式である。ここでハーンはフィッツジェラルド訳が英文学に及ぼした影響についても簡単に触れているが、このような発言から、ハーンの知識の背景に、同時代のフィッツジェラルド訳の英国における受容史があったことが伺われる。

奇妙なことに、以下『ルバイヤート』から詩を引用しながらその内容を学生たちに説明するといった具合に講義は進行するが、フィッツジェラルドの訳についての言及や説明はこの後す

っかり影を潜め、まるでハーンが、オマール・ハイヤームの『ルバイヤート』の内容を講ずることに徹しているかのように思われる展開となる。

最初に引用されるいくつかの四行詩は、「人生のはかなさ (impermanency of life)」を物語るものであるが、ここでまず引用されているのは、いずれも上で見たヘルン文庫所蔵のフィッツジェラルド訳で、裏見返しに頁数の記載のあったものである。まず最初に引用されているのは、66 頁にある 45 番目の詩であり、ハーンはこの詩を引用する前にオマール・ハイヤームの思想を「存在とは何か、と彼は問う。それは果ての無い旅路の途中のつかの間の休息所以上のものではない(What is this existence, he asks. It is not more than a momentary resting place during the course of an infinite journey)¹⁰⁾と詩の内容を先取りしながら紹介、「彼のここでの思想は、人生を旅路の旅籠で過ごすつかの間にたとえる仏教のことわざによく似ている(His thought here is much like that expressed in a Buddhist proverb which likens life to a short time passed at a wayside inn.)」とし、その心象風景を東洋的なものとしている¹¹⁾。このような前置きに続いて引用されるのは以下の詩であり、もとのフィッツジェラルド訳では余白に傍線が引かれているものである。

Tis but a Tent where takes his one day's rest

A Sultan to the realm of Death address ;

The Sultan rises, and the dark Ferrash

Strikes, and prepares it for another Guest.

それは彼が一日の休息を求めるテントに過ぎない

あるスルタンが死の国に向かってゆく途中で

スルタンが旅立つと、褐色のフェラーシュが

テントをはたき、次の客のために仕度する

この詩の内容はまさしくハーンが先に紹介した「人生は仮の宿り」という仏教の無常観に通底する思想を表明したものであることが分かる。ハーンはこの引用に続いて、おそらく学生には分からないフェラーシュについて、「フェラーシュは、毎晩旅行者のためにテントを開き、朝になるとテントを畳む部屋付きの使用人のことである(Ferrash is the chamberlain the man who prepares the tent for the traveler each night, and strikes it (That is, removes and folds it up) in the morning.)¹²⁾と説明している。

これに続いて引用されるのは、同じく人生を、砂漠のオアシスでつかの間休息する隊商にたとえたものであり、フィッツジェラルド訳 67 頁から 68 頁までに至る、48 番から 51 番までの

4つの四行詩がまとめて紹介されている。

A Moment's Halt – a momentary taste
Of BEING from the Well amid the Waste -
And Lo! - the phantom Caravan has reacht
The NOTHING it set out from - Oh, make haste !

Would you that spangle of Existence spend
About THE SECRET - quick about it, Friend!
A Hair perhaps divides the False and True,
And upon what, prithee, does life depend?

A Hair perhaps divides the False and True;
Yes; and a single Alif were the clue -
Could you but find it - to the Treasure-house,
And peradventure to THE MASTER too;

Whose secret Presence, through Creation's veins
Running Quicksilver-like eludes your pains;
Talking all shapes from Mah to Mahi; and
They change and perish all - but He remains.(Ibid, p. 347)

束の間の休息、一瞬の憩い
塵埃にまみれた命の井戸のほとりで
そして見よ！亡者の隊商が達する
虚無に、そしてそこからは逃れられない、ああ急げ。

存在の輝きかが明かすのをあなたは望むか
かの秘密を。急ぎたまえ、友よ。
偽りと真実を分かつのは一筋の髪
そして、どうか、人生は何に依るのであろうか。

偽りと真実を分かつのはたぶん一筋の髪
そう、そしてただひとつアリフがその鍵
あなたはただそれを見つけるのみ一宝物殿への
そして神への道もまた同じ

その神の秘密の存在は、被造物の血脈を
水銀のように流れ、あなたたちの苦痛を取り除く
マー（魚）からマヒー（月）まであらゆる形を取りながら
彼らは変化し、やがて滅びる。しかし彼は残る。

これらの詩はいずれも難解なもので、講義で突然これらの詩を紹介されても、学生たちにとっては禅問答のようで意味も分かりかねるようなものであったに相違ない。ハーンはそれを見越したのか、これらの詩についてほとんど逐語訳といってもよいような解釈を続けて講じている。以下に少し、ハーンのこの詩の解釈を見ておきたい。詩の引用に続いてハーンは、一つ目の詩の解釈を以下のように説明している。

Life is, he says, only like the waiting of travelers for one moment at an oasis in the desert to drink a little water. The desert is the unknown Infinite; the Well of Being at which we halt, is the present world into which we came out of mystery, out of nothingness. And we drink and pass on and vanish back into the nothingness out of which we came¹³⁾.

彼（オマール・ハイヤーム）は言う。人生は、水を少しばかり飲むために砂漠でオアシスに束の間旅人が立ち寄る休息のようなものに過ぎない。砂漠は未知の無限である。我々が立ち止まる人生の井戸は、我々が神秘から、虚無から立ち寄るこの現世である。そして我々は水を飲むと、元のやってきた虚無に立ち戻るのである。

このようにして見てみると、ハーンの解釈がかなり自らの心情に引き付けてみたものであることが分かる。難解なこの四行詩の意図するところを分かりやすく、またハーンの抱く無常観に合うように説き直したもので、全体に「我々」と一人称複数で述べることによって、ハーン自身も誰も人皆同じく虚無より生まれて虚無に戻るということが強調されている解釈であるといえよう。

これに続けて 2 番目以下の四行詩について、ハーンはまとめて以下のように解釈している。

まずは人生の無常と知りえぬことを知ろうとする人間の努力の虚しさについてである。

In the immeasurable darkness of mystery each life is but a tiny sparkle - the light upon a spangle; therefore what is the use of trying to find out the secret of things? The secret is infinite, while we are of a moment only; why waste that moment in trying to find out what we cannot find out? You say that we should try to discover truth; but who knows what is truth? ¹⁴⁾

神秘の測り知れない暗闇の中で、それぞれの命は小さなきらめきに過ぎない。ほんの小さな明かりである。そうであれば、物事の秘密を知ろうとすることに何の意味があるのか、秘密は無限であり、我々はほんの一瞬に過ぎない。そうであればなぜ、見つけられないものを見つけようとして時間を浪費するのか。あなたは真実を発見しなければというが、しかし何が真実かなど誰が知ろうか。

この箇所は、先に引用した詩の逐語訳的な解釈というよりは、四行詩によって喚起された無常観をハーンが独自の見解によって再解釈し、学生に分かりやすく説いている箇所であるといえる。これに続く箇所も、四行詩の内容をパラフレーズしているというよりは、これらの四行詩からハーンが敷衍して考えたことを披露しているように思われる説明が続く。

Very possibly the difference between the true and false may be no wider than the thickness of a hair, or the difference of a single letter, if you could just find out that one little difference (but you never can find it out) then you might find yourself at once in all secrets. But of Him you shall never in this life learn anything¹⁵⁾.

実に確かなことであるが、真実と偽りとの間の違いは、髪の毛の薄さよりも広いものではない、あるいは文字の一つの違いである。もしもこの小さな違いを見つけることができたとすれば（しかしそれを見つけることは決してできないであろうが）、それですべての秘密が氷解するかも知れない。しかし、「彼」について、現世の中でわかることなど何もないのである。

真実と偽りの差を髪の毛の厚みにたとえているところは先に引用した四行詩の解釈そのものであるが、文字の違いにたとえるところはハーンが加えたものである。また、これに続く説明もここで引用した四行詩の意味のパラフレーズというよりは、ハーンの解釈が存分に加えられた内容となっていることが分かる。

Everywhere He is, everything is full of Him; but you can no more find Him than you can pick up a drop of quicksilver between your fingers. One thing only is sure; that He is all forms, all things from fish to moon; and that all their forms perish and disappear - through He himself remains eternally unchanged¹⁶.

「彼」はどこにもいる。すべては「彼」に満ちている。しかしだからと言ってあなたは、指の間の水銀の粒をつかむよりも彼を見つけることは難しい。一つだけ確かなことがある。それは彼がありとあらゆる形を取っているということ。魚から月まであらゆる形を。そしてそれらすべての形は滅び消滅するが、彼自身は永遠に変化しないままに残る。

ここで注意すべきは、実はフィッツジェラルド訳の中では、ハーンがここで何度も述べているような「彼」という三人称は出てこないことである。だからと言ってフィッツジェラルド訳の中で「神」と名指されるわけでもないこの三人称は、講義の中では、しかし、アッラーを指すものであることを暗示するかのよう三人称とともに描写されている。これは、四行詩の中で言葉少なに述べられている思想を、ハーンが敷衍させながら学生に説いている場面であると言えよう。とりわけ上に引用した最後の四行詩については、「インド哲学の教えと似ている (resembles the teaching of Indian philosophy)」¹⁷と述べているが、これもハーン自身の見解であり、ハーンはさらにここでいま一つの四行詩を引用して、『ルバイヤート』の思想がインド哲学とどのように似通っているかについて説明する。

A moment guess'd – then back behind the Fold

Immerst of Darkness round the Drama roll'd

Which, for the Pastime of Eternity,

He doth Himself contrive, enact, behold¹⁸.

一瞬は慮られ、暗闇の無限に巡らされた檻の中で

芝居は演じられる。それは永遠のつかの間の慰みに

「彼」ひとりだけが、趣向を凝らし、演じ、見つめる。

この詩を引用する前にハーンは、インドの哲学者の世界観を、「ある古いサンスクリットの詩人は、この見える世界を神がほんの暇つぶしに一人遊びしているチェス になぞらえている (An old Sanskrit poet compared the visible universe to a game of chess which God was playing with Himself, just for amusement)」¹⁹と簡単に説明し、上の四行詩でオマール・ハイ

ヤームが同じような考えを表明していることを述べている。人生はこのような「人形劇 (puppet-show)」に過ぎないというのである。このようなインド哲学についての知識は、とりわけアメリカ時代のハーンが単独したインド哲学関係の思想書の記述に裏付けられるものであり、ハーンにおける原始仏教の理解に大きな影響を及ぼしたものであると考えられる。この後さらに、人生の無常観を嘆くような四行詩が 30 篇近く引用され、それについてのハーンの見解が説明されているが、個々の詩の解釈と検討については、紙幅の関係もあり、別に機会にさらに細かく検討を加えることにしたい。

そのうえでここでは、東京帝国大学の英語および英文学講師という身分のハーンが、フィッツジェラルドの訳業を英語による最も卓越した訳業として紹介するはずのこの講義の中で、フィッツジェラルド訳の素晴らしさは冒頭に簡単に述べただけで、あとはむしろオマール・ハイヤームの『ルバイヤート』に表明されている思想を述べているのは何故なのかについて考察してみることにしたい。

ところでフィッツジェラルド訳ではこれらの詩のうち 3 つが 67 頁に、1 つはその続きの 68 頁に収められている。このうち 67 頁の 3 つの詩については余白に傍線が書き込まれており、ハーンが講義を用意する際に、学生に紹介すべき重要な詩として準備していたことが伺われる。これとは裏腹に、68 頁は、裏見返しに数字の記載はないが、67 頁の詩から続けて読み進めると、同じように人生の無常を物語る詩として連続性があることから、ハーンは講義の中でまとめて紹介することを思い立ったのではないかと考えられる。

3-3. 日本の無常観との相同性

ハーンが東京帝国大学の講義の中で、フィッツジェラルド訳の紹介に事寄せてオマール・ハイヤームの『ルバイヤート』を学生たちに紹介しようと思いついたのは、ハーンが他で説いている、英語を媒介することによって世界の様々な知を自らのものとするができる、という知的活動の実践であり、そのために実は日本人学生には容易に内容が理解しやすい、仏教の無常観と通底するような四行詩を敢えて選んで紹介したのではないかと思われる点もある。

たとえば以下のような、人生の無常を酒で慰めるような詩である。

Perplexed no more with Human or Divine,
To-morrow's tangle to the winds resign,
And lose your fingers in this tresses of
The Cypress-slender Minister of Wine.

人間であるか神であるかもはや迷うことはやめよ

明日は計り知れず、風に任せておこう
そしてワインを注ぐ系の糸杉のように細い女性の
束ね髪に指を埋めたまえ。

この詩についてハーンは、「宇宙の謎を解こうとするすべての人間の努力は絶対的に無駄なのだから、詩人は「世界をあるがままに受け入れることに敏感であることが必要であり、決して知りえないことを知ろうとして心乱されるより、自然が我々に与えたもう美や愛や喜びをそのまま受け入れればよい(Since all human effort to read the riddle of the universe is utterly vain, the poet says, “Let us at least be sensible enough to take the world as it is, to accept the beauty and the love and the pleasure Nature offers us, without troubling our minds concerning that which never can be known.)」²⁰⁾と述べている。また、この詩に出てくる酒のことを、イスラム世界では酒は法で禁じられており、この詩における酒も、文字通りの酒ではなく、現世の快樂のことをたとえたものであると考えるべきであること、糸杉のように細身の女性がイスラム世界ではもてはやされることなど、イスラム世界についての知識も一通りこの箇所ではハーンが披歴していることが分かる。

いずれにせよ、酒が具体的なものであるにせよ、女性の体形がどうであるにせよ、現世の快樂によって憂さを払う、という思想は日本のそれにも通底するものであり、ハーンは講義を聴いている学生にも容易に理解しやすい心の在り方としてこの四行詩を引用したのではないかと思われる²¹⁾。

また、万物の移ろいやすさを物語る詩として、以下のような詩が引用されてもいる。

Yet Ah, that Spring should vanish with the Rose!
That Youth's sweet-scented manuscript should close!
That Nightingale that in the branches sang,
Ah whence, and whither flown again, who knows (*Ibid.*, p.365)!

しかしまた、春は薔薇とともに消える。
青春の甘く薫る巻物は閉じられる。
かの夜啼鶯が枝で鳴いたように
そしてもう一度現れるのはいつか、どこなのか、誰が知ろうか！

日本の学生に分かりにくい箇所として、「美しい巻物に麝香で香りをつける東洋の習慣(the Oriental custom of perfuming beautiful manuscripts with musk)」と、青春がそのように素

早く閉じられる巻物になぞらえられていることのみをハーンは説明しなおしているが、それ以外の意味は学生自らがおのずから理解できるかのように、詩のみを引用してそれを詳しくパラフレーズすることは控えている。

『ルバイヤート』の四行詩が、日本人の感性に相通じるものがある事の証左として、ハーンはまた月を見ての以下のような詩も講義中で引用している。

Yon rising Moon that looks for us again -

How oft hereafter will she wax and wane;

How oft hereafter rising look for us

Through this same Garden - and for one in vain!²²⁾

あそこに月が再び昇る

これまでも何度も月は満ち欠けし、

これまでに何度も昇る月は私たちを探し

この同じ庭から、そしてむなしくも一人の人のために。

この詩についてハーンは言葉少なに、しかし確実に、「庭に昇る月を見てすら、詩人は物悲しくなる。そして彼は、かつて日本の詩人がそうしたように、その感動を表現している(Even the sight of the moon above the garden makes the poet sad; and he expressed his emotion somewhat as more than one Japanese poet has done in the past.)と、日本の詩との相同性を述べているのである。

英語を学ぶハーンの学生たちにとって、このような親近性のある思考を学ぶことが、内容の理解に大いに資するところがあったことは想像に難くないが、結果としてハーンは、『ルバイヤート』と日本の無常観の間には相通じるものがあったことを講義における解釈を通して証明していることが分かる。また、ヘルン文庫の蔵書の書き込みから、おそらくハーンがこれらの思想の相同性を驚きをもって発見した様も想像できる。講義の中で引用している四行詩のほとんどに鉛筆による傍線が引かれており、裏見返しにその頁の記述があることからそれはある程度証明できるのではないだろうか。ただし、講義の中でハーンは、必ずしもフィッツジェラルド版の順番で詩を引用しておらず、なぜこのように紹介する順番を操作したのかについては、むしろ『ルバイヤート』に流れる無常観をある論理に従って説明しようとしたためではないかと考えられるのである。また、左見返しの書き込みのローマ数字の意味も、講義録の精査からは分からなかった。このことからフィッツジェラルド訳の『ルバイヤート』は、単なる講義の準備のために書き込みがなされたのではなく、いずれ随筆などの作品の中に反映させるつもり

でもなされたのではないかという推測が成り立つのである。

おわりに代えて

ハーンの晩年である 1902 年に発表された『骨董』に収められた随筆「露の一滴」には、以下のような記述がみられる。

There is no loss - because there is not any Self that can be lost. Whatsoever was, that you have been; - whatsoever is, that you are; - whatsoever will be, that you must become. Personality! - individuality! - the ghosts of a dream in a dream! Life infinite only there is; and all that appears to be is but the thrilling of it - sun, moon, and stars - earth, sky, and sea - and Mind and Man, and Space and Time. All of them are shadows. The shadows come and go; - the Shadow-Maker shapes forever²³⁾.

喪失はない——なぜならいかなる自我も失われることはあり得ないからである。どのようなものであったにせよ、あなたは存在した。——どのようなものであるにせよ、あなたは存在する。——どのようなものになるにせよ。あなたはそれにならねばならぬ。人格！——個性！——夢の中に出てくる幻影にしかすぎない！あるものは無窮の命だけである。あるかに見えるすべてのものはその命の震えでしかない——太陽も月も星も——大地も空も海も——精神も人間も、空間も時間も。それらはすべて影なのだ。影が現れては消えてゆく。——影を作る者が永遠に影を作るのである²⁴⁾。

この記述は、従来ハーンの仏教思想を物語るものとして説明されることが多かったが、こうして『ルバイヤート』の無常観、少なくともヘルン文庫所蔵のフィッツジェラルド版に書き込みがあり、東京帝国大学の講義の中でハーンが引用しながら説明している『ルバイヤート』の無常観と比較してみると、必ずしも仏教のそれと狭義でそれをとらえるのではなく、むしろ宗教はどのようなものであれ、東洋一般に、あるいはハーンが大きな影響を受けたものと考えられる『ギリシア詞華集』にも通じる人間一般に通底する無常観のようなものとも考えることもできるのではないと思われる。『ギリシア詞華集』に見られる無常観も、広義には東洋のそれであるということもできようが、いずれにせよ、ハーンと『ルバイヤート』の出会いは、ハーン晩年の思想形成に無視しがたい影響を及ぼし、それが講義だけでなく作品にも反映されていると考えることができるのではないだろうか。

参考文献

The Writing of Lafcadio Hearn, Boston and New York, Houghton Mifflin company, 1922.

Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Poets*, The Hokuseido Press, 1934.

Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Art, Literature and Philosophy*, The Hokuseido Press, 1934.

Fitzgerald, Rubaiyat of Omar Khayyam in English verse / Edward Fitzgerald. - New York, Houghton Mifflin. 1888.

平川祐弘訳『骨董、怪談』、河出書房新社、2014年

竹友藻風訳『ルバイヤート』、マール社、2008年

注

1) ヘルン文庫収蔵図書の書誌情報は以下すべて、『富山大学附属図書館所蔵ヘルン(小泉八雲)文庫目録改訂版』富山大学附属図書館、1999年による。

2) ラフカディオ・ハーンの講義録からの引用は、北星堂出版の Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Poets*, The Hokuseido Press, 1934.および Lafcadio Hearn, *Complete Lectures on Art, Literature and Philosophy*, The Hokuseido Press, 1934.を使用し、以下書名とページ数のみを示す。

3) *On art, literature and philosophy*, pp. 315-316.

4) *Ibid.*, pp. 511.

5) *On Poets*, p. 343.

6) *Ibid.*, p. 344.

7) *Ibid.*, p. 346.

8) *Ibid.*, p. 346.

9) *Ibid.*, p. 346.

10) *Ibid.*, p. 347.

11) *Ibid.*, p. 347.

12) *Ibid.*, p. 347.

13) *Ibid.*, pp. 346-347.

14) *Ibid.*, p. 348.

15) *Ibid.*, p. 348.

16) *Ibid.*, p. 348.

17) *Ibid.*, p.348.

- 18) *Ibid.*, p. 348.
- 19) *Ibid.*, p. 348.
- 20) *Ibid.*, p. 353.
- 21) ちなみに、この四行詩の最終行（原詩では3行目となる）「束ね髪に指を埋め（lose your fingers in this tresses）」という記述は、ボードレールの韻文詩「髪」および散文詩「髪の中の半球」を髻髻とさせるものであるが、ハーンがこのことに気づいていたか否かは今のところ不明である。ただ、アメリカ時代のハーンがボードレールの「髪の中の半球」の英訳を『タイムズ・デモクラット』のコラムに掲載していたことから、この詩に関心を寄せていたことは確かであり、他にも「髪の本が運命を分かち」という四行詩を講義中で引用していることから、ハーンが「髪」を重要なモチーフとして考えていた可能性は高いと言えるだろう。
- 22) *Ibid.*, p. 356.
- 23) *The Writing of Lafcadio Hearn*, Boston and New York, Houghton Mifflin company, 192, pp.111-112.
- 24) 平川祐弘訳、『骨董、怪談』、河出書房新社、2014年、116 - 117頁。